



伊地知文庫  
文庫20  
221



懷紙配畜一事

賤物

一乃勺午勺

三多想開

多勺杯牙三研執

皮肉骨

陸陽

未奉祀保言保慈亡國之牙祈附祀始一事

口十祈

口十祈

遍席臥由係

親白姓白一事

有文之文一事

丑者止希相西

真孝行

拳勺心祈一事

去義一事

入印一事

厚公初淡一事

切方大紙

昭夜席紙

漢物古事所和洋此世作紙

紙紙 是宣紙踏事

名若本之紙本 詞心と事事

身之紙之紙紙 云脚付立立事

小限と事事 名名事事

化名心紙紙 前前事事

片片紙紙 下下事事 出出紙紙

小小紙紙 出出紙紙

出出紙紙 出出紙紙

羊齒其虎皮

花前

出出紙紙 又又紙紙

片片紙紙 十十紙紙

皆皆紙紙 草草紙紙

向向紙紙 出出紙紙

了了紙紙 出出紙紙

吾吾紙紙 出出紙紙

長長紙紙 出出紙紙

Handwritten text in a cursive style, possibly a list or index, written vertically on the right page.

大原三吟

伊地知氏書冊



連款乃初五字とをく事地水火風空乃  
五形と且箇の賦物法定む事と祈且倫  
則是我表を八句と定ゆ其阿鍍呼子  
阿昆羅羅呼欠と川合寸裏と十四に定ゆ  
事七貫と我と六根と二三乃紙の表裏と  
二十八句と定ゆ其法苑二十八句と又衆生  
乃毒指の毒と含ましむ故に現在後生と用ゆ  
又白の紙をおりて紙十句と事十二因縁と  
男神女神を加く先を若身裏八句と定ゆ

事仁王般若の八偈乃至と云事一の義  
氏是と云く吾輩を道と云く

式書云四打と四季に和と云なり  
表裏の先天後天の八卦は此也

一 家藏秘傳抄云杯と云うは功神三十  
一字の初は佛の三十二相をわたり三十一  
字は向乃影ははしと云く三十二相と云り  
け用を向乃分たり且向と云く木火土金水乃  
五行也又仁義禮智信の五常一別るを佛  
一氏乃其字の説をのせり此向は二の口をく

三劫と云せり方生佛亦分れ候し是を二と  
ふくまはるはなす時ハ佛一初乃不より佛生  
衆生とあひしらたゆ多し世がまはる功  
徳が成志守故よ此向はまてありふまの  
不即佛道よむるといふは世謂也精進といふ  
十徳を免たり未せの人ハ修らば世道を  
わたりたり

一 賊物と事口交り一紙別よと云  
上賊と事口交り下賊ハ賊物ハ修り候  
及向乃山と云事ハ向乃山路と云候

賊何路は款と云く先を下賊と云く又考分  
に諸と云く是のありは山嶽と云く山何と何乃  
字をりは書くしそつと賊と云くおむり有  
文字を先と云くあつと後と唱あつととの語り  
りし且つ此賊物と語るは云ふ

山崎路は仁吉木春日船玉津祖今人磨

- 一社願法示の云うは飯合来し和来し神法示と  
前し書相常乃と云く賊何と書く
- 一二字込書二字付略あるの書は賊何と字と除き  
二字込書と云うと云うと云うと書く

一子句と云うは八百約日と前と云くは賊物と云  
是合と賊物と云うははる時おむり仁吉と云  
事おむり

一百万身は、何人教隔日と事

一子句身は、おむりは、何の初日と云うより一巡  
まを寛ち二日と云うは、何の初日と云うは、  
二日約五日と云うは、何の初日と云うは、  
おむり二日より五日と云うは、何の初日と云うは、

一被云百約のたし子句と云くは、何の初日と云うは、  
百約と云うは、何の初日と云うは、

是よりも拙らむ心よと折返しし思案成  
めらしむるとする事一毎人乃習ひし子句よむ  
てはやうに案し出しし一旬し當り事  
ありし子句よむ成し出の情を別し  
心をやらむ志く其の句乃任立と徒こいつく  
常より有事の事し出らえやたせむと科心は  
も亦しきまうた下はひよとあぬ不設案  
て人の耳とし驚く人とは事一と目の上  
ふくむ百約の道は百約の道心をうけし  
風情乃句あをせしとまの句よむと成し

子句よむとくりん紙をく日風情をせ

と噂むぐりー 前回川

一 ~~一~~ 是は云子句乃句乃物と我智直乃十のを  
九の十のけりし一ありしは百約の道は  
執筆乃相違を聞くとけらるる度とらう  
ししてそのゆえはまけらうなる事とあえ  
子句よむ前句ははのこ吟せぬ吟すし  
句をきく相違しきと一なる言の存し書  
とあつてこのまうなる事と相違する事  
あてふ二のよれ合えいなる事と一なる事

思ふうらひをも白地化りしくおす巻し能すきと  
て子白ゆくも表紙すうらうて下子かかり  
たふ事也

一 卷句事考し能なる白と事考く今  
文心抄よりあるもかしく其折く乃  
意の氣を伺ひら時ををきうすて有ゆら  
は子白下白乃時考し長なるまやりに  
有し竹まじりたる卷句はことなる  
て又えををきわく又えは

一 子白あるの巻紙乃なる白乃切字の落是はせ  
おしうらうらとせぬ事

一 夢想し是歎し紅板紙の夢考れを其  
時(時)又ひきき時乃時と服す  
下の句乃夢考し時服す上の句考して  
らんとも当しし切字をくを文一ても  
白乃やうに白地す(白)を考の考  
乃くしてと読とら(下)白乃  
想し時考しては九句(合)白一句

脇注漢語守丸同書



一 露白服まての三子忠に露白の季子と持服  
季子をまゝに以好時に才三乃心持る露白乃  
季子を以て才三とす  
**衣的抄**  
一 祇公の露白の其年其の前後其を守侍るを  
みまらしむる如く如く花鳥風音よりうらうらと出言  
乃姿を心まけ人子能く其根を相公とせり  
ちとつものことなり九上中下に立如衆  
ててはく世月西日ま人よる成はくして佛よ  
露白を衣をせしよるあはれ衣袂乃るきり  
よ成よりとくきり又翌日

一 露白の佛の露白をこひたるよ  
し日の又矢乃るあはれ成よりと書く  
かしくそ相判よいそくこの世を露白と  
まこの露白は月をせり如くその時言を能  
き身たる事しとすはれたるもや及佛  
必赤ん腕に糸とくや房乃其體し、え、初  
乃露白を下に心仲よ時たて加振よ有き  
や道を身は教む能く事する  
但又高時加振し乃こはる人の為  
あはれとく

~~田中~~ 田中 田中 田中

一 数句、其不乃山海地京四季草木乃飛苑  
落葉風や霧霧雨落霜霜温集  
き月の上能下能、時多たがう春乃  
鳥秋の生南忘即妙く風神を息を  
物し、か移くたをさるやうるを不也  
ろく代位月次し道うるを乃数句又  
子句乃数句、数日、支思業をりしき  
御下れし、第一編、心乃

数句、二夜息り、此其願作り、庭前草

木葉山を水志け、い時長風京のま  
月方し、作意息あり、御し、  
~~武南書~~云、昼の粗い乃数句、  
板の屋の念句、  
一、く、四季草木、想ら、  
をんれ、  
一、数句、  
也乃昌あり、  
かれ、  
子は現在乃哉

月乃秋苑の春立ありたりなるを  
 行気苑乃こちなる関しかれ 秋の  
 雲を若月を流と見ゆらん 月乃  
 冬はほろろと新苑の雪はし 西苑  
 ちけ気ちりやてはくす柳木を  
 是はまの如くもてふなりてあそ  
 ぶれは憶ふれも翠帯はとの不  
 二字一花ゆゑとてふなり 秋  
 佛は青の云現るなり 又字あり  
 ありれ縁もは白乃はけや也

あつねはし初霜もあむ春日  
 此の秋を乃しあれははし 秋と  
 なるふきし又上よあいのやとて  
 中乃て文字  
 子也とてきていかにあむの  
 色はや 色はや  
 ありとてあふはし 口合乃  
 やとていかにあむとあむ  
 上よしとてきていかにあむ  
 かなとあむ  
 口合乃  
 秋の  
 月乃  
 秋の  
 月乃

此等の上平此作意んん方えり可きや  
上平下知乃言也ありて成と云留位相結み  
一連袂乃道所ありてあの中をし教ぬ白服才  
三入秘言也大事し先服三の分あり一平  
はく口まこ二子對一平三子あ之口まこ是秘  
きよとくはく口まこ云を教ぬ分相當一とす  
服したく一教云教ぬ分有ぬを何るり  
とも對くるはくやりにいけり又  
通教と云教ぬ分あや通く志うとけぬ  
とるる也

はく口まこ乃事

水唐一花咲けけ可きつる  
れしをうゆら心池乃をらす  
教ぬ分心氷といろをこ停りあどし花咲  
けけといり知を口まこはれしたく  
道教ぬ分ゆりく咲き道に松若れ咲  
けけといりか根の口まこ教ぬ分をいり  
とい事

對一服事

名し志くぬ少草花咲けけ可き

芝生かられ乃秋乃深丸

是は若もあつぬといふ芝生からまこと對し小  
草花といふは秋と對し川邊といふは  
水と對し大りゆ形乃細を對し細と  
云りきまの詩よ

春 風 桃 李 花 開 日

秋 露 梧 桐 葉 落 時

あ形對すは字は心なく教句とあるは徒見  
しく細と對す  
ちづりまの事

雨降つて風をりきまの本末は  
涼しくあひく涼は此むま

教句は白鳥乃あつぬとあるは服より立  
乃ありて涼上涼は此強すと云り是  
初やえ、及ひかきまの事、是は一向教句乃  
中よ背き今片命の事以類行と云り此  
乃細を徒とんゆて遠縁をえ修りなま  
教句を細とらむ守らま細を遠りま  
云りて細と云

是、服一袋、相傳

眼、幾度も真若と申りて人し又若  
一白志、ねぬんなくして、我はと仰りて  
すな、寺とて中、か子と云、句を  
伴ふきいし、招地はまら、ま  
又あいらた、乃招を、吾人を責、歌  
乃ん、  
~~事~~

招の白と、幾句よ云、歌したる詞を、く、  
を、は、い、く、れ、ま、た、  
たき、い、思、ひ、く、招の白、  
招、ま、乃、恨、あり、一、ま、あ、い、き、い、  
招、ま、乃、恨、あり、一、ま、あ、い、き、い、

依、付、ま、ち、之、付、  
紫、し、口、付、好、き、  
白、分、な、  
年、い、く、  
宵、い、  
毒、草、を、  
庭、志、  
ち、り、  
本、の、下、草、乃、  
あ、

依、付、ま、ち、之、付、  
紫、し、口、付、好、き、  
白、分、な、  
年、い、く、  
宵、い、  
毒、草、を、  
庭、志、  
ち、り、  
本、の、下、草、乃、  
あ、

今一その口の午申なるる(糸の進境)  
~~二集~~云云なしれ教句なるも糸を以て爲す  
下知の教句ありしは予ら幸あらんや木として  
えゆ下知不及はは心かけ下知乃大  
幸此てありは得

一才三の教の句は修せしよりし長きも此  
本意とせし句なりやしよの才三乃不  
あり即そ又現在の文字にいくいと爲  
るも乃志文字にいくいと爲し軽いに  
預えしとして糸爲し玄糸を流

糸の教句は下よりきやうに山ありて山水色  
ありて水色は他路教作意ありて依附

宜し ~~糸集~~

才三の教句の心法將一花柳以柱をかきと  
伴下も種の名別ありては守が二本もし下  
われるやうに本ししと糸 ちと爲る幸

糸ありて平人の所用 ~~糸集~~

~~糸集~~云云はき才三の心持といたして教句  
客人の心糸はこみ乃まはふも乃心又  
亭しし才三の相傳人の心糸の教句

乃心うしをぞてきいしとをぬむらうしを  
しりしとゆゆしお三相代人あともをむ  
乃位ちとよすなう又ぬむらうしてし  
すゆしお三の心成はのこおくとさ  
とも長さく出さよすなうしりのあひ  
ひい季牙はく屋大してまき  
~~お三~~お三とすこ乃てよをその  
かくゆしをくつよとはよ句は長さくち  
あはえお三あしむむいんをわうては  
お三お三お三とら後とらよ長さく京

寺行の思入あうくお三めきて関ゆる  
にゆらぬはゆしとす七ぬす  
お三お三ゆしとすをはお三よすき  
お三の事ぬの白のさぬまかすく  
ひやうしゆしとする初をくうゆし  
写しきとゆしお三も同事にく  
今少長きとゆしにえてぬゆし  
名もあしぬ小茶花のさうな  
さきせかくれ乃秋のはあ  
夕万言音ぬる月よ貯停く  
専順



此亦三句教句より教亦三句に就る由で結  
なるよりヤ 来し ~~本~~ 漢

教句教亦三天地人乃三才と云ふは教句  
を天の始り教は地を始り教亦三才の始り  
ゆゑよりして教は教句は教は教は教は  
教句と建立し亦二人道乃始りあるを  
能令やまきの句は亦身大長言く平句は  
ゆぬやまきと云ふ也口わち亦教は教は  
教は教は教は教は教は教は教は教は  
貴人等も教は教は教は教は教は教は

つひに ~~耳~~ 教 私教句は天陽の 健し 学者  
て有る眼は地陰し陰は 健し 学者

或問ま云教乃句は地はかとなり 陰し 陰は  
陽はまきと云ふ也是を教教句はまきと云  
行をさるるまきと云ふと云ふなり

一亦三つてと云ふ事此事は 漢にたり 亦と云

三つのつひに口は有る教句教は教は教は  
下教は教は教は教は教は教は教は教は  
教は教は教は教は教は教は教は教は

為せぬ事こそ思ひし中し申さる  
上中下句此由より一句の結れは

~~梅~~ 梅の比を述る

今方の朝を飾らし今朝の月 結也

野色乃男麻のあしとよま

里人のま結るるれ思ふえよ

此等句或ありしむしむしにとあせばは  
今結の句の移りはよくなれそふ言はれ  
一才三才とありて言ふはれとありはまこと  
字をくつていふは只乃時をさす字なくは

寸ゆ事 是あり

~~梅~~ 梅の比を述る

有と云況あり一向結よはくいな事  
し決中況哉とあえと一切不可有混  
しりくふ事なれし西況と好く

きき事ありて言ふ

ちる市とえ行不ありれ小結

庭色野色乃麻のかくは路

朝夕かこふ言乃心離え

結也直ノ句なり

一省相介兼末式同中詩依の法は起兼持  
合と一の句中心を起し二の句中又其心  
兼三の句中て將し末の句中て物の心終合  
す兼中ありまのりも教句服才三に  
起兼持卷子束心終

一古念を一年と有らね合教句客人終言る  
乃心持て教句よかいろ句とけたど物乃  
あう字中てを以てとむとてあは言  
なとあていいたうとあぬ物才三相持  
人のと長らく出なあてくはあ

依入初心乃人の字い〜風神持かき〜才三  
あまいたる句作てあは白ち、報の句よひき  
ゆけやすくとけとに白ちありと中のあり  
とばせり〜と信〜い子白ち才三かさとり  
長とさくお〜た〜は〜後と〜を  
あり〜し白ち、報れ白ち、打係人  
七白ち、子白ち、句か、終安〜と風系風  
を〜り〜て〜八白ち、言、あつ〜り、  
唯何と形か〜と其神を〜や〜  
八白ち、あり〜とや〜九白月を紙打り此

事らるる長列をてぬむし十二句あり  
夢想神紙天教懐伯あといえ心物は侍を  
為春季別有る季地流し十一句目より  
心をめらしし思案を要し風姿をかぎり  
むし前句は能付し字とて面談すり句毎  
をくれお句とりうけはるる身をたぬ必  
しあし立はるぬおえし先は紙行り十二句  
三句以内とて思ふにけ安くとら身其ゆは  
思ふし句が来りし一書身はたをまてつて  
をや、形ゆえんし心あ即して存ふより

卯の句物やえ初より一旬毎にとくれして  
れりやう句を細くまなす事しけ未乃さか  
て有る要いし初は只此定かぬ振まじり  
しと先を乃諫し

一あけ句は字あましせぬ事し句句の冠  
あけ句は後しむしりてむしりゆあぬ  
若しの折乃表意の句をえしりゆはあ  
挙句は句句の字をせぬし  
登る振身三等に休れ字必し意意し  
丹しあよの敷し休れ字あまて平句の振

此等如服色、才之の句化之、所より云、秘文  
あり、師令、

小男、藤乃、命乃、立や、青字、く、宗長

麻の字、く、く、け、た、き、お、入、師、れ、を、ら、ど、

中、よ、去、く、は、お、才、之、大、夏、乃、根、く、お、三、は、宗、領

夕月、夜、は、身、や、かり、は、の、秘、文、く

を、ま、な、く、月、や、別、端、よ、交、ぬ、く、也、お、三、 故、春

白雪、秋、苑、乃、み、お、の、面、を、も、こ、て、お、三、 昌、記

宗、長、宗、領、の、才、三、の、任、れ、津、白、ト、云、り

宗、乃、句、化、明、し、能、く、と、有、昌、宗、平、句、乃、才、之、者、月、之

一、三、の、よ、お、義、教、と、く、六、乃、姿、を、介、て、り、先、達、は、身、侍、り、し

と、こ、の、よ、色、大、乃、お、種、の、心、句、毎、よ、口、り、は、く、可、也

風、也、之、句、八、せ、乃、沖、抄、云、風、と、い、ふ、を、也、之、句、也

之、の、を、物、よ、也、と、い、ふ、ゆ、く、其、事、平、記、に、も、て

其、心、を、は、ら、く、し、す

若、て、き、く、く、こ、を、之、外、一、時、也、侍、上

二、條、乃、大、園、を、財、を、よ、う、て、種、揚、し、奉、侍、た、り

乃、物、ま、う、く、句、乃、ん、あ、を、す、風、の、乃、な、く、し

賊、か、ら、之、句、賊、の、量、し、祇、么、の、云、あり、事、を

た、ら、ち、よ、か、ら、く、い、ふ、こ、を、も、あ、る、よ、あ、る、

おら日を空方乃露は成子なり 侍上

是ハ物ごとく心ををりて通一なる白なる  
る一こまやとんをとりを心ぬる一

富良乃川白ハ

すきちり松霧之霜か心忘根来

花之條一色ちるぬをみらるる

比るる一

下紅あちりよはゆ一宮衣来

数乃字を花之條りありとるる一をら白なる  
乃一以乃白なる一物をとりて物之似する云

世俗は有方をかひとると云詞(宗貴書ゆま)

遠山之袖乃下なるをあかな

真寺と云ふかれをかくそまなぶゆ

日月雨之み録乃松風其の水 侍上

是ハ此の物之由はきとるを又なり(同なり)

きとら乃真の白なるを(宗貴の書ま)

本風をおとをたよれ柳かれ

冬川乃霜の柳や滝乃いと

雅きとととと

夏草も花乃袖も成より

見なきをちよひなきを句し留して言葉心  
をわらうりてなしくいふ所の分  
宗典に思ふ事 をききまよふ事とて  
いはをいびぶるを落書にす事  
のちよひまよふ事とて夕月夜

頌 花椿みりる玉乃みきりか  
ほめいふ心なるを頌れ句 宗典の  
記ふを神よ先がら候るりしん  
神乃とら本す名代しる家様

古今集の彼者席の注よ頌の方よ神祇乃心有  
なりといひ此注を後か或人の書入る言は  
と云ひて其談はと心に心得し新を  
作り作者に傳ある事。 新  
宗典の道は波羅密の心是身法身これ  
然り事 宗典の道は波羅密の心是身法身これ 宗典乃  
地子居 宗典の道は波羅密の心是身法身これ 經論をよき  
禅定を修するは宗典に相なるなり 宗典  
宗典の義 宗典の道は波羅密の心是身法身これ 宗典の  
物をとらといふは此の宗典の義の物と云

るれよふら言はまをきし 眞の物にさうとせ  
まうとく此の心をあつてすし 是風以息乃ひ  
くまを愛のいけらるるふい月 又賦雅の  
まうとく誠の物に志をあつてあつたき 雅を  
さうとくあやほらうとくまき 又頌のい  
く神よりし 宗紙の云去義 以中より  
雅を執りて身 さいしき 道をわ  
すりてし 用語の思を邪と用ら  
早貴世を片外心とす 南流入心し

一連歌よ名 此祈れ知しといふ八祈と好要と  
せり平四風詞遠心對理乃八祈 ~~紙~~紙抄  
雨身と云ふ山よ八頌尾 備は紙抄 一や  
るりをろのゆとえたるかすめらるる事し

月かをんをやを乃山のを  
時多しと名るはみ子に方乃秋 有山の文は  
に午身と云ふ前句乃詞ありし ちる紙言知ふ  
ごとしとら合とけらるる事し  
たを右と西を 一乃一

相人乃ちこり矢とら入山よ



風情付と云は花の向白こはく風情を付ねる也  
風情付と云は花の向白こはく有標を付る事  
名知ん花よかきうりりたり  
又やえじありぬ乃月の朝をぬ  
何付と云は言葉のきうりりてうけて長工  
惚と付る事とのあは糸を付る体詞付と云  
うは糸乃結やあれきうり中絶く  
遠付と云は春と秋を付るは里と付る事  
今と付る事

ひぐいのうしんやゆらん

我はまの庵あて開つ郭と云

心付と云は昔合色なく初乃をとりとあく  
風情付と云は只心をとりとけ付る事  
馬をわきと云はわらうりせり

朝やうと云は夜のゆまつらる事と云

桐野付と云は田子島松と云は春の古島

鳥乃と云は春の古島

打かす尚よしのむしかりく鳥の田あは

理付と云は上の付振き之ぬ白あれ大せこよ

あつきの心あはれをけしき

傳れり舟よりしきく風

松をきき臨み此雪乃おちりて

是の舟上浦乃臨み此の痕をけきりて

きれとてうらなはゆきゆく心けしき

世帯の心たふむお前二きり船の跡る

一<sup>十</sup>出<sup>十</sup>玄神の白衣人の白衣

袖を習子を若のこきとて

春日野乃上る舟山のそと

と色はけむといひたつ山

之あといひらうはよ業乃庵

古はとるまを人乃所けく

秋えく人をけあしうき物け

つも思て候たりたり

松風もたつ舟一張ゆき人

長き

かきまえらうは霞むす

左るよをゆる世殿乃舟を新く

唐乃因也ともなつらん

久うらるる秋のも山乃夕白乳

心教

あまうらよそまことそあつた

別まこいれ物さるる想や二千年因行

夢うらうらもいぬめちの

月教花ハ此を乃物あつて

みら志ねる文とらとら同えり

一う考如は之日月乃あふ 良行

日依長くそん世業のたれわ

此乃乃西え晴る所信をせり 信眼

川のよしとらよたうきり

三昔野の夏まをゆくそを移す佛

有心祈 心教云有心祈と云偏心地終行傳入先云道方

志本立山乃はむま又著

ゆそけけけを里とそり 信

見より心内は心よあやせむ

い後乃世の秋乃夕著 良行

ゆそけけけね舟乃は知り

今乃良路より本陣の所り前著は土

今乃志る所著乃下らる

凡かぢる此本の山人外多日

部よかぢるや安あぢるん

竹のおもき危危る鬼をるん日

あとい心を細くくうり

部よたよあぢるきあぢる

おりのぬ色をさるるん

夕ま書をの綿なるたきて

くさうそとぬ本かまの者

作をのあぢるしと同物を

乃あぢるたさるるん

家紙

濃白くし

水やにほりて落とるん

玉をよれの二紙よはせつ花の枝 信昭

其若をそるに穿てまぢるん

縣いぢりの草をのなやるん 良

五年より人乃手そすくあぢ

赤のこまをいひとる乃かほく 信五

舟の中まく老るるん

うま草れ笑の水よ流るん 善

あふより入ふ中乃月

あふより入ふ中乃月  
あふより入ふ中乃月  
あふより入ふ中乃月  
あふより入ふ中乃月

月を空に照らすは

古態野の山は木松吹ゆえ

あふより入ふ中乃月

草や店の軒をよる人

あふより入ふ中乃月

秋席この夜はいつに交わすは

あふより入ふ中乃月

位を乃々此南子月あく

あふより入ふ中乃月

かき野のあふより入ふ中乃月

面白く

あふより入ふ中乃月

あふより入ふ中乃月

あふより入ふ中乃月

秋のあふより入ふ中乃月

あふより入ふ中乃月

山乃えは松乃あふより入ふ中乃月

信昭

昔を年しと立想りたれ  
危ねそといけりしんせ  
人の子しとあまこえんたれ  
松平川まき年の縄は平をうけ  
日  
皇女御神の白

今こそえぬみくらた子と也  
花の後本乃女ぬき春の草  
日  
ゆらりしと里まらわれ  
去る如野此草わら後よ終りて  
日  
かこえしと昔も花と加ねん

麻乃着こしとタムれ乃空  
日  
くゆらこころよ罪やきゆん  
身を守つて昔乃店のりたあり  
信眼  
春向のそとと後屋に塩やき  
舟よきまらわら水をしりてあり  
水芝

一節御神の白  
あつた乃色々神のらねあり  
信眼  
信由よか存よき花大立向川  
信眼  
かこえしと昔も花と加ねん  
人こそ思ひたもぬ色えとく  
日

手勢くち山部よつく社あれ

新田津よりそとゆき海は志保十佛

新田敷をえんたてて来たり

あふてといひ余乃修きの松の空

心より只うまきこととに志保のえ

入江の船道かきも世の仲一日

早右神の白

書をあつちてととくはえん

あふ乃根も人の物くしゆくはえん

上下を定むる意うゆりり

きくはあつち川乃水

善行

信つそりおちまきあつちの市とく

物よかきそたし紅きあしき海は志保

あつちおちまきあつちの市とく

あつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつち

を白紙 兼哉

兼哉

忘られのあし乃ち病れ才もいせ  
法乃蹄跡一のそを山色付きて心敬  
心敬の書も云十御意もたすもたすハ  
句乃谷とんとの事 ちるなり  
一篇序は如後一季 先哲の云世は  
是言此室用なるなり 御令下の句は  
如後の心あそそ上の句を篇序は  
して云御才一 又上の句は如後の心  
ありくへもたすも下の句を篇序  
是ありして云あるなり

ほと乃びくあそはれあそはれ  
月御るお場乃者乃おちけ 空  
か一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
お一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
氷とけくも雪ももまあり  
ちりわは事跡のた乃下りい 一  
此之句お句は如後乃んありてまこと  
きききき故し付句を篇序はなありて  
いひ御く前句は内はけり  
ねとくげのそくちるくねれ



花より山より夕より月のを云 良し

前ししろ口ふたつある業の房

かく入まて月をくくく足れ 信昭

此二句前此上の句は其後乃心あがりて云ある事  
あとの下の句は其後序もなうしてあ句と  
清く云意はたふ斗こはさうい必上の句  
を云御一あ下の句はゆほり下乃句は云  
果ずく上の句は侍をさうさ物とて  
まより若よ云果さう句感情秀あ送な  
うるなりと云り 經也し 序正流通と云

先序分は根より因縁譬喩をとと後  
は正家むとて其後乃服をきて末は又流  
通ふとて其後乃後を根とて云意すし  
是をその名の篇序也其流は相対なり

式同中 篇は書物歌号 第ハ人かり尋らたい一タタメスニ久根

序は其書ノ序なり 序ハ中ツキナドシ物ホトノ事し

其ハ其書ノ本ノ初ノ細カクハ此是ツキニ来リ先程ノ下ハ

其ハ其書ノ本ノ初ノ細カクハ此是ツキニ来リ先程ノ下ハ

其ハ其書ノ本ノ初ノ細カクハ此是ツキニ来リ先程ノ下ハ

此書ハ其後をよとてあし上下の句は二つ

吟し合く心然と一と世月心あくを  
句毎は冠を足すも此書を修して事  
多かるる一け方然つまね好まをさ  
けちいふとんされた然後句をのこむ  
福と思へりおちや一と云依一と云をを  
ふかこころを一南不乃用云物一云依  
と亦有一と一前句を秋句なりとく  
吟し合せよと一前序歌也依のあつた  
乃女新六義の和歌乃古根る一と云  
此二よをどういふと一乃道の序破  
急諸経法輪馬序正依通因縁辭  
喻し不のゆとい依と一  
前句よゆりく亭中く果る存句あり  
一祈なるを一古人の句と一は世凡情了  
くらんて

神の舟りまよひ鳥にあり

中狂世一この目とるぬみし如繩 信昭

うつらまのめしとくんち

端よこつ若孫の相根を津山因何  
んより只其ま事一志や一と云

入江乃而きてうま世の序 空

我同身奉序也如流世亦此亦奉序也乃言て  
大ありらるる後し如流ははあはに細くある後  
うらももるるしとあなうちか句は身せらま  
あはんやうり上の句ま奉序也乃心ありて  
下乃句は如流るるしあり下乃句奉序也  
上上の句如流るるし有一句は奉序也  
乃心ありては白如流るるしあり是奉序  
ついでにうらうら奉序るるしなり  
春らうるる奉序るるし序 白如乃也

衣をすくふ事 云乃香久山流

又一句奉序はやくは白如流方るるう

流せらるる所乃花子及の風留は室子の如也

世う流せらるるしとをに白ええ云の一事りもさう  
あくをさしは白如流と云事 いたし

く我句を奉序也乃心なりきさうふも  
我句を如流すははを用はるる如く一也

事件より松平大和守殿をうらまへるる奉序

追序也如流一事 せまうら

とていふことなり

瓦吹野中乃森の夕かす

邊はさしち乃うはらるどまなほ念たし  
序はえや言化乃瑞作りのそたはし又歌  
如句乃仕立依ハ惣れ心を下乃まな字  
乃字あまゆくかふ心は世白あてん

<sup>上</sup> 卷序如如依ハ瑞方ま別ニ白まアリ  
親白跡白し事ハ必数書

ちしちしはくし志ぬせの中

和留乃原よせえを加つし仲津信

十道やふせ屋まけなをま

停なつまれ日りのくら乃松の色

け身振跡白乃神し前句乃姿言禁はす

只偏ま四まそけさ  
親白く如く事

氷の上はゆるまぬは

はゆ夜の月乃影野の花序高

あま屋敷を又行くゆ

片曇乃里乃あまり世間なして高

親白跡白はんをそなれらるしとこひら  
姿よおらゆるそ道の介るるし親白

乃言三つ此をやく誦白此をさ法志すしゆり  
定家は誦白子のこ秀述ハあり歌白ま  
婦しこの終るしとめん姿の歌白心乃歌  
白姿乃誦白心乃誦白  
歌白 有相教 有義經 世諦 有門  
誦白 無相禪 不有義經 義諦 空門  
極くし 別道しこり 悟りよ心法  
かりん 伴るく 空門 此生死をわ  
れ有言 佛法よ 空門 大快乃心を足  
おとす

未の少正の歌白 彌善の歌白 トテ二種アリ云  
歌白と云ハひきも法もくは是れ大詞のきま  
さく法云云は

昔野山子の梅の枝より 花をわさる  
此東國中 正乃歌白ト云ハ世の常 かきとく  
縁アんて法もやく 終るき法も乃更に誦白  
乃法知よ歌白ノかぎ法もく法と云云  
ひきき此歌白ト云ハ二種アリ 其者相由ハ者  
也也也  
法もくハ新法ノ歌白をとりハは必歌白

て用 山梨 字も女もむかへて思案らんし  
心教の私語も昔乃人の言は成はるは前白  
心を清く其者相通と有るはゆくと人相通  
ゆりとわきあぬの事

お家の森の本才之はんて好まへ立かす  
こころもそとていつし しかやこれ好まへ書知  
不違 送る乃ぬ白紙や三三行先し

一有文無文、事、尋、水、の、尋、常、人、世、文、  
送、方、斗、竹、共、二、折、終、く、習、て、終、い、世、文、乃、  
お、こ、心、初、書

読なきとく久く一宿とひく  
危くくおまき一て世一また  
文上乃理をく句論乃句やく御る教  
ひかしくあえのよ

有文の白

あごよよまに身をあとなりねん  
おの白乃花よまららのころろひく  
何しとえ書乃さひく  
終なきくく山け乃ひく  
浪乃くく漕くく乃舟人

考子の風は聞えて松もさる

か根子秀然は好く入く一白此神は  
りきて身命人乃思ひようはる言は有  
文乃句もはるし 宗はとく好きた  
きい加やし此神は

有文空文の句乃事 古歌歌の事也大元は  
足守のさむ根子お遠有し一白乃おそれ  
打あつてまてくおそれるわは耳もはは是記  
実くは有文の句と云又心底は記りて  
そ記の歌をさむは有文乃思はるまて

人色有されも有文乃句より空文乃句を上取と  
事志るされまて物しゆりむいぶ

心教乃くわく連奇之身四着と云わの  
空文乃句たては後を妙しよはひ月はゆ  
くこと云悪きれくあらまてしはと  
即かをさね打あつてん乃こりら  
不なきを空文の句とすく又有文乃句は  
月のめくはる事をも初はあはけ  
いとされ大ゆくは実とせは後乃好なる  
也音也之詞ははくは解くさよとあは

此等一悪の心地も為し一作し記す  
詞ありてを尋ね九はしとすけら統句  
志存を有文乃句と名付く堪能の志  
宿より事と云り詞し心し風持し世は  
し一て只ゆしむいもさうあふ句を有  
文と云や危ういしと記されきり

定家の毎月抄云常人の秀逸し所と云  
てゆるは文ゆる秋のさつくと久く心  
とくれきけあらはかゆひてゆるれ  
石芝の事いんかかんうけ秀逸下

きよしゆ一と秋とくも後ぬをく久ゆる  
と申志るされきりきとくいしは文乃  
句い心なきもの詞やしも物はいい後  
て志しし外要の更とい思ふやよえい  
きやぬ根なる心し亦有文の句心あり  
乃ら此やさくわいひさゆしなるし  
すくたるは外要の更を斗いひて  
わしくはく物はいをせくすを  
思ふやし心なるし  
一 基依ハ有文十九年このより 任文十九が志



第 二 十 七

何よ心をこらすもな

書とあぬ能治る後必の之也

文 詠すもよまう後乃知あけ

行すとも形よ書あぬ能治る必の之はく

十上文ありそは識さあらしはるこ又能治

う後乃知あぬ能治る必の之はく

後乃知あぬ能治る必の之はく

とたす只云志くぬ能治ると思ふ

定家の乃知あぬ能治ると思ふ

之河の乃知あぬ能治ると思ふ

其書連群乃連終る事

河のきより終る事乃知あぬ能治ると思ふ

先を在りしきよと云へば終る事乃知あぬ能治ると思ふ

と立終る事乃知あぬ能治ると思ふ

終る事乃知あぬ能治ると思ふ

昔乃こころあきみあ津波はなると云ふ

云根形も変く地准し又終の河と云ふ

川流乃よりくると云ふ乃よりく

のより形もすれあき

浮世のまほしき人なりけり  
散花乃やや梢にらんむらん  
やのまほしき人なりけり

是五音連聲のまほしき人なりけり

一五音お通の句と云はるるに  
切月よのむらさきの家  
きし世二将とておれく  
きと死たる人のこと  
死きしとちねる所  
まらぬ連声又お終る

十七に  
お通一と云はるる  
間を  
エソノ  
音お通乃乃  
を  
お通一と云はるる  
間を  
エソノ  
音お通乃乃

お通一と云はるる  
間を  
エソノ  
音お通乃乃

此之句

ga ko  
-na

やと並んやの言ちあまうを(此の七文は  
の言ち申よりエコと通すらゝあまの  
句)

旅えやちぬ花よもゆらん

朝のさくら花梢よあけく

小窓や窓乃とまはり八月もあじ

本ころきよおつ切ると月影て

乞皆わ若お由(連袂) 越ら上るハ

不即お音おるを(心)おら(先)行

と高の身(あ)て加(お音)お音(あ)

舞のり上(ま)り又(あ)由の句ハ月影

うま(あ)此(あ)由(あ)た(あ)え(あ)母(あ)の(あ)

初心乃(あ)は(あ)舞(あ)を(あ)ま(あ)け(あ)活(あ)心(あ)の(あ)

お由(あ)を(あ)ん(あ)ま(あ)あ(あ)母(あ)音(あ)わ(あ)ら(あ)る(あ)

の(あ)由(あ)下(あ)れ(あ)舞(あ)事(あ)未(あ)世(あ)は(あ)子(あ)の(あ)た(あ)ち

志(あ)く(あ)一(あ)並(あ)者(あ)し(あ)不(あ)修(あ)の(あ)人(あ)は(あ)あ(あ)る(あ)ま(あ)の(あ)

足(あ)す(あ)今(あ)す(あ)れ(あ)は(あ)あ(あ)人(あ)申(あ)真(あ)は(あ)此(あ)徑(あ)と(あ)戻(あ)

わ(あ)の(あ)お(あ)さ(あ)う(あ)和(あ)秋(あ)の(あ)た(あ)へ(あ)ん(あ)の(あ)心(あ)は(あ)や(あ)ま(あ)

か(あ)した(あ)ち(あ)お(あ)れ(あ)を(あ)悦(あ)慢(あ)の(あ)り(あ)あ(あ)ま(あ)の(あ)心(あ)を(あ)

此(あ)舞(あ)事(あ)の(あ)通(あ)安(あ)ち(あ)の(あ)藤(あ)木(あ)岡(あ)沖(あ)撰(あ)也(あ)

類抽竹西女也

一或同中及肉骨乃之新と戸事作り  
及之凡神の事し肉と之言家の事し  
骨と心の事し其之新能相潤を居白  
まことしも縁ちる事し  
和方乃十神法及肉骨乃しゆら事作り  
長之見出之是始し懐有面白是  
肉也又拉鬼有心及て此筋麻是骨  
乞ハ今文作しりて和事とあるは(其)  
後之れといふ事と事と也と記し之は

一其草初此と云り中根舟と云心初かけあひ  
体真と云む色むむと云り外と云茶と云  
大言らりあひと云成行と云也  
一草初書と云白作は陰陽比二可あり  
以ホ事と云り口事人のて方以方と云  
下午八白と云理をふくきとむと  
何初子白初と云し陰の事と云  
加しと云年八初と云初と云初と云  
と云と云と云と云と云と云と云  
と云と云と云と云と云と云と云

晝のりびのるるを夜に覺えを覺  
と云ふと云字はこれに陰の白に如し

後よりびのるるを夜に覺えを覺  
かすをえはひのるるを夜に覺えを覺

而して終に陽乃白なるを夜に覺えを覺  
物乃白なるを夜に覺えを覺

の如くもくもくもくもくもく

本件に書云陰陽乃白なるを夜に覺えを覺  
事し為ともををみな終るを白なるを

は有極也と云云白なるを夜に覺えを覺

とて来たるもとりとりとりとりとり

之を志すべからざるを陽に如たる事  
陰に如たる事と云云又言此の事し有る

終る口竹ありて陰陽なるを白

舟乃のり終るを白なるを夜に覺えを覺

碑字をなす松の本を柱と云云又終る

又陰陽よりき止る

をりて来たるもとりとりとりとり

これをすのるるを夜に覺えを覺

一 俗言俗語を言ふの専嬌ふと云ふは是れ  
日本に俗言と申すなり

昔の俗言と申すは落て去るる昔玉と云ふ  
事柄に俗言に申せしむる

日くり春の午をおとす

或玉の如きいづる日くり

俗言と申すは俗言と申すなり

春の俗言は水鏡宮と云ふ事柄なり

一六 宗祇の云ふ事柄に内は二種有り一は心の事柄に  
二は心の事柄に心の事柄に云ふ事なり

佛をまかせたる事なり

二月の事柄乃ち節子葉と云ふ

前句の心法事なり人々の事なるを  
やと教へ事と云ふは心法事なり  
か振へ振るは心の事柄に云ふ事なり  
西の事なり

初春のあり玉と云ふ事なり

るとの事なり又ある人

は波路ゆく志が乃ちうらな

はまじしと云ふ事柄に云ふ事なり

次より右の批語より、和のありの事し、其  
集よりなり、其も一統乃事あり、  
西に北す、批語、神も心のその久、神乃其  
ふ、何れと云、よく、終り、云々

一 <sup>九</sup> 能云、道の身之國の神も、事には、  
一、こと、其國を和國と、し、  
和のあり、其も、鬼神と、し、  
或、乃、心、も、和、國、乃、  
く、長、す、  
ひ、

く、  
神、事、  
其、  
其、  
其、  
其、  
其、

其、  
其、  
其、  
其、  
其、  
其、  
其、  
其、  
其、  
其、

一 秋の書云云 入卯の傍に 櫛の書云云 入卯の傍に 櫛の書云云  
心乃入卯の傍に 櫛の書云云 入卯の傍に 櫛の書云云

本居青丘の書云云

をホキキくゆくも 櫛の人の心 櫛の人の心  
子安字今がし入卯の傍に 櫛の書云云 入卯の傍に 櫛の書云云  
ののびてる 櫛の書云云 入卯の傍に 櫛の書云云  
きくも 櫛の書云云 入卯の傍に 櫛の書云云

櫛の書云云

世白書云云 入卯の傍に 櫛の書云云 入卯の傍に 櫛の書云云

て宜し 櫛の書云云 入卯の傍に 櫛の書云云 入卯の傍に 櫛の書云云

櫛の書云云

けい白書云云 入卯の傍に 櫛の書云云 入卯の傍に 櫛の書云云  
志の傍に 又 櫛の書云云 入卯の傍に 櫛の書云云  
却向事云云 櫛の書云云 入卯の傍に 櫛の書云云  
事云云 櫛の書云云 入卯の傍に 櫛の書云云  
一 櫛の書云云 入卯の傍に 櫛の書云云 入卯の傍に 櫛の書云云

櫛の書云云

夜風く 櫛の書云云 入卯の傍に 櫛の書云云 入卯の傍に 櫛の書云云  
を 櫛の書云云 入卯の傍に 櫛の書云云 入卯の傍に 櫛の書云云



山室の秘を中へ置く冬へ通るる心は入  
卯とや戸のゆるし先ツ夏の上室と身とむ  
を海らあふくくくく

源氏物語と云ふははり帝の事なればおれ  
ふ知人のまなくは透事今と作りて向う海  
事をももふ知れぬ事な作りいふやうらう  
之句は海と云れて松の根を空を世本たと云  
句ははる海又ある年の様なとけり事と云  
候にそとてまことおれはみ宗之品源氏  
とくゆくむくくくくくくくく

さういふれもまうはり回事なる一丁た  
去此物語一條院の御時作り出りたる御  
やわらう茶の前人多く源氏と云ふは  
とくくもまうはり妙なる人なまことあはれ又  
け物語をもも知れぬ云々の二年何れなる  
らふ一きりた去候て対持のしとあはれ  
しんは後知れぬくくくくくくくく  
此物語の心と保さん好まふに候て向うく  
ききすまひをいはる氣あるをくはう  
はに源氏と云ふは源氏外典のまは

難うなるとはやりしをこし時てまこし二白精

常然の終り桃林極の人

吉文乃 夢を乃あさる白雲ゆり 宗如

菊白の仙人の思ふを竹帚終り終りといふと  
よふ仙客の心印を事づくゆら成權の姫  
寛をもとむかの御中乃の子をてあすの  
かみれ終ひく終る白の云共云をねく  
信終りて常終り終りも様うん終りん  
言納り乃乃の宗如と源氏をよふ  
信をよふよふと終り終りも終り

宗如 常終りよまよし 一ぬのまあ

一 宗如の云は成ゆ終りを云ひり欠か同取ふ  
奇念のせむ事乃と定ん終り終り  
初終りよく心成ゆらんを信えうたやく  
信ん只右来終り来らるると成同斗は  
終り多知と

一 宗如云はうん極し事申目委し若木をよ

乃云の終り終り集し終者あつてハ終り  
事乃の終り終り方あつて終り終り終り  
不うううて終り終りをとる終り終り

之は乃字なりけんり者と受て作り  
申うれといふ其心あひゆるぬえ其のせむ  
可一うといふくも別して作り  
苦勞なりきし付しを茶人のうらよ

むを玉乃包の更りも樹けり法寺に原より  
此うをれゆるい法寺に原よりあきを身より  
法寺に原をけむに能似合ゆる一又樹けり  
き川原もむてお包の更りといふも樹けり  
て似合けし夜の更りといふも樹けり  
云河なれら身よりんあれくも向なく作り

なりしりゆゆし

気此のゆきまそとさうしかりんれこもして又  
ゆあまのつり舟けりこもいみもしてこわ  
と云極道し気此のゆきあまあが舟を考  
合よとるまそとさうまそとさうかや  
乃事いそとて終りんりそとさうまそと  
るりこもしてあまよ

一 漢と云事一 二白終きて後りまそと事

何れも只言此の白くゆりくもき日あたる  
今もねむらぬわをさるれかく身はた

車乃たよ寄一かるは

人の心馬場れい村の時くく  
とせゆるあ白く大公望し事しあかて心  
二句ゆる方かのをとの場乃日村りの日  
むふいよ立くく車ゆえく尺寸もあらん  
と當年乃後ゆりしはれ合えたと云は  
たとの場とりなり車は物え車に  
ううてく寄一かるはた事ゆを時え

あひらひくんはも控すか旅し事  
のりく又楊貴妃王昭君をなま  
知りく先くせゆもしてさゆり  
一歌云和漢とくつし何んをい事  
んて下よきく取き事ゆへく  
大略二篇やうる事心くして長  
ち一とゆりくえらにそのく  
ゆえ侍人よ合えち旅の心ゆ  
ゆんいゆしん旅をく持て細  
白乃何之風持能望んよわけく

心法事奉の要らんは當時の人々身より  
をえ早くししけしけはきりせらる事 あり  
お白とて時を移しし事 只掃かえむし  
不え知るえいえにやれぬ事ありくいはれん  
知るえと知るえと一いつしけえいえ町の  
一 <sup>廿五</sup> ~~心法~~の要らんは當時の人々身より  
うけ知ると知るえと一いつしけえいえ町の  
知るえと知るえと一いつしけえいえ町の  
たりとてしけえいえ町の  
一 ~~心法~~の要らんは當時の人々身より

心法事奉の要らんは當時の人々身より  
をえ早くししけしけはきりせらる事 あり  
お白とて時を移しし事 只掃かえむし  
不え知るえいえにやれぬ事ありくいはれん  
知るえと知るえと一いつしけえいえ町の  
知るえと知るえと一いつしけえいえ町の  
たりとてしけえいえ町の  
一 ~~心法~~の要らんは當時の人々身より

ゆる人昔もくまゝ六音節のたや音とまゝ  
音の上紅雲麻るもけりきき　(むらみ承を  
ゆる煙の事一音字のへん我をぬまうて  
人のけり煙のけりきき身　又能え  
是てう人のをききえをけり口惜く　(夜更  
之臣の云えぬみ承のちう句ハせむ月  
凡たもけりけり又法之買玉のけり  
りどゆけり法をんをけり  
昌隆の云えぬみ承のけり高たるとハ  
てむ心けり

一 事初書云因を痛むるは不承高よと  
きむと一う乃たるを形く人のみ承  
不をけりけり　(ゆきなるもけり左の句は  
譯もいふは承れ夕久れ  
松竹や少竹乃江あまう  
う松竹や少竹乃煙もいなる起法ハ此後  
煙をけりけりけりけり　(同えきや  
ま件書云因を痛むるは不承  
白川を承の雲よ先あえん

吾と海くけらハ前乃乃初はよる一又  
 必前は初を言たりそ前のみぬとをさ前ら  
 のやうに守一—旅がとさな必前の上  
 及くは言てしすな—旅せぬ必前は  
 旅せしむれふてし  
 本書云必前は旅せしむありとい先  
 風情とを守白くえ旅—

あはれ旅の先旅の色

大井川君乃名乃乃旅る旅く  
 而打れよき口くしる旅

伊勢山を吹風は秋をらう

一本は必前と守まは必前とける事  
 宇藏の云吉来は必前こまうよも別する事  
 なくゆりし海山乃梢よらまは必前とける  
 もくしかり—名吉来本は松林橋  
 射不恵ト又言くちとゆるは秋有るは  
 作し少旅の言はつと二海弟とける下  
 初端の言は秋有ると一初只口の言は  
 云くは初—雲の言は初は初とける  
 ゆるは初の言はつと一初は初とける

乃處十ト作らに邪の者ハニ也

山里と作らに唐大羊の字付作らニ女子御

方より山里に於りし唐や意おん可くは道

か振の事師返とも事はのこゝろおれ只

つ道とられくも別志おれし

一

祇事の云けらくも事可くもあを越作ら事

さ此よりき句と前よりしと後事りて了る

あま事と作ら又付くも句とせし

申くはれよひれくもの一息付付あ付事

もゆるし必秘事くも事付は字初なるとい

文くあの首也ツ中守は志と作らに前付

娘ハ只付ぬ言よりれりく後又たくとん

て理やあはてまを遠なるとも付よくと

るし有し左れ句宗初と只事付し

詞の字くしとせやりたるとも

六回乃信取さくハ去初取ト云白

神也を神乃七代をともくははてト付作

け前句二句文と事是理之句の信ハ去初の

みれられと一句也おれん高の信取相

立向海たるとせ作らあ去初取るとん



河内物紀略十ト對きしと加振子違ひ  
たらく字如しう若くやゆんちまを  
七代をとうと云わし和國と付ゆし文に  
ふはゆしうたん其力か祝の事しゆら七  
一兼我希希云付にきき白は符とあり  
古事女流るとして難白たん心打ら  
はるぬら別の名ま白三ハありやすくて  
其の亦なき白にハ丹司のおれこことた  
白まハ左之可也いふは白なるなり  
又前よりほまりとてましく其白乃

とくはゆわしゆらとまもあらし  
あらしあらしむら付よの好まきとらと打か  
やう此人ハゆぬれと才難白とゆわゆえ  
ゆらゆをけら大古方ハゆらゆらゆら  
古事女流うんちとてまけし一息  
夏身前とく上平此ハ梅如し尺せんを  
やすうゆら白よりしかりて録事しを  
る一其白ハ録事と厚白々付らゆら  
先哲ハゆらゆの史ハ新表白付らゆら  
とく月苑の前白付らゆらとせん

蓋なり付新うしとをきくむらん  
只有此まきまらふは作ら能者てまき  
答

一 京碩し書付にきく白あて京中へ成  
考ふまきまらふは作ら能者てまき  
情しと付く未廣くちるあはれ人みな  
自ら京へく心もほくらまの也前を  
能付るやとれり一途に存事と身  
其白くまらふは作ら能者てまき  
はくしと付く未廣くちるあはれ人みな

よきやうにむねおはけたの事

一 祇云我の限よりん成さくは子とハ  
守の人と考合く白法案にゆし時ハ  
も限目止つて及ぬ方成案にたたり  
知れぬ心をしほあはれとにゆるり  
又思ひらくは子と貴人而も乃前  
作らぬは作らぬは作らぬは作らぬ  
人よはせり心とすれは評評あく  
白おらるは作らぬは作らぬは作らぬ  
は作らぬは作らぬは作らぬは作らぬ

づとて是れ何の時能く為らばとせば  
 在のなまもしかけく面白くはなまも  
 何れもさそえをて打ひつちとせし  
 心成ひましくはよとせし又何とせん  
 仁をさすく面白くはなまも  
 せくんとせし事すし先ん然い  
 くつふつとせし何れあはれ  
 何れもさそえをて打ひつちとせし  
 心成ひましくはよとせし又何とせん

一 他者心はくいな物申後事 事 事 事

初めに何れもさそえをて打ひつちとせし  
 心成ひましくはよとせし又何とせん  
 仁をさすく面白くはなまも  
 せくんとせし事すし先ん然い  
 くつふつとせし何れあはれ  
 何れもさそえをて打ひつちとせし  
 心成ひましくはよとせし又何とせん

之世法是極くく乃乎さなるかた  
 さいえん所しそや化者の中と  
 いた地盤の風折れと廻く心方か所  
 地は行く九正法は子母くくる平人  
 思ふくは。此人の年と経守事と心  
 之危先引ん引ぬ人五根はこひ縁ひ  
 とく心正法は出のく邪法よて入は  
 口情用心は要也

一 宗義曰一死のつあきを好く守れば好  
 妙事 此をいふあし心ヲ教ふるく思

案ツめらるは二ま事一あれをむ久く  
 あ人しして法をくくそ然ん時空は極  
 やすくして表述は極事一信之  
 之と空の人の高たうん案せんと思ひ  
 乃やや字細や作一は道ていつあも  
 秘そ右子史とくく高た乃志とと然  
 所ととせよと作一げも秘そ右子  
 之えはうよ案一は八高たの妙有  
 一くくはひかせとそ執筆は村病  
 しせぬ是は極下くあよ身有可法

人の心もわかれしと仕はば掃蕩し不後  
けり心は神乃嗚とある所の所宜とおも  
らふ能はれし入目しなく又きし物も  
又もぬれし心乃可き事なけりを月  
さしりけし人の真かと思ふ事今しは  
信をよき法修し作をえぬ事あげむ  
比とありけり他不二乃思ひをきと  
し人の心は神とわかれ人の心はまじ  
終り上もよき事なりし事と教ふ事  
打しあるは慈悲と云ふけり紅花

苦樂の道はなれんてしけり病死の理と  
親とれ心仲の鬼神やとて死を免  
去如の理もよき事と皆々実相不相違  
背と信じてゆきぬ道なる心をせん人  
い心をよき事とて

一 念白と云ふは法を信じて云ふ事  
をいふ人の心なりんは法を信じて  
なりんは法を信じて云ふ事なりん  
如く法人の自然なる事なりんは  
なりんは法を信じて云ふ事なりん

たぐらるるひまの師と結ぶる存とて  
佛法も魔と云ふありま欲も  
よふ一現あるとて一法やれは魔  
乃日ありぬる一まのまの  
仏乃是別と心ぬゆりい道よ入る  
心ありまの志ゆり一空の  
を深ら空乃山の梢と見ては心  
まれゆる不立信と見くは一骨と白を  
思ひゆる移人と心けりひまは移定  
のを移るもふは法あるをありの法

まらつてとてんてん

一 心教書云云 佛乃之身はく法  
報應一之身空能之祈の姿乃白あるを  
打ひまく即り同文ゆり一通身れあるを  
我祈之根と凱法佛あるまは、いそりれ  
是法乃好土色快りゆりしきとあるを  
報身れあるを一人の機とゆり有時  
現し有時はかすは佛をれも智恵新  
の身あるを、かすは即りすくは出聲  
よ、いそりれ、いそりれの、白は法身れある

ある一智多えんも徳を名えんとしつゝ  
心一しはまてはつりま長一をむむ  
人の眼あはゆかるとし中道宣相の心  
相おのひはるま

經云 唯獨自明す 餘人所不見

唯佛与佛 乃能究尽

此法と佛のしる實の佛と尊と人なりと云ふ  
ましくゆかるとをゆかるとゆんか  
信りぬる形と實の佛いほこの姿と心極  
らうま欲と定ゆるん心は通つたるま

實の佛誠の言とてはまある姿あり  
人只のまより事に通して感情徳成  
あつて是れ天地乃森羅萬像と現  
法より佛の度量と心との姿と愛と信  
とこれ物中なるを七の尊法身は佛  
云又其法身は佛なり形ありて唯二  
とまぬ化者正見ありて  
真實のありて大虚なり  
かけを心と心と心と心と具是國々  
成のなりて印より證は佛よりなり

大なることにて仁義あり大智也大徳の  
迷ふべし此の皆非也芝の前の有る有る  
皆空也

一晴し合席の心新茶白川のこまやと  
長えく出せよすゆしけくあ白く人  
と案ずる程よ白くはまらうワるま白出集す  
ゆいりやもん出うんくともらうく  
費えこれ晴のうよ

桜花咲きたしれはあふのふいりんや  
けふれやにまうせむとあふ

一性分は信事四約の目と一平切者下  
すんやしはるし形て首約あわ

一是は空地のあむと云川色あは川色の事  
山教との教はあむと空地はあむと云

一罰心はころしん心相をさしるす  
かたはあむと云心はあむ又あむ  
はあむあむと云心とあむあむと云

一白く云物と付はあむと云はははは  
前よいさつすあむと云はははは



きよひ

我富は娘は乃月をえくといふ言  
あはれかたると云事は座におく侍もよ  
ゆきの花乃おくより清く

けい白事休言はよ、まよして十  
侍とんせふゆいをもくく志く

一  
名指の表とるゆき河らど勢にせぬ前  
白いまよくけい白う立ゆけい白よ安  
とや事んねるく一前白うあつ  
かろくしやり事はひらくけい事味

あふゆいもあををけい白くいひ立一  
けい白をい皆月花をい思ひくけい白  
とまよくしゆきと化者いけい白  
とまよくしゆきと化者いけい白  
を月けいしゆきと化者いけい白  
くけい白のい

一 下乃白二五三四二回と云事

一 方をけい白先言ぬ

一 上の事けい白知るゆ

丁冬くこぼれ下るる雨にちけり此の春の雨  
ききし二かとおぼしきこゝへ依る言  
ひよこし初と云ふ言の月あきの初をこゝ一句に結  
加く言

本はききしこゝへ川乃十五

をこゝへききし乃初之

とる氷乃とけりしとゆり

ききの言の春乃月色の初を

と一啼も言ききし此の言の初を  
しし初れ九句乃初結し成る結句

なりたる言乃初とる亦結句なり

初乃初とる言乃初乃初乃初

初初れりし言乃初乃初乃初

よく立初れり言字きき初乃初

字初れり言字初れり言初れり

一初れり言一字の初れり言

~~初れり言初れり言~~の初れり言

初れり言初れり言初れり言

初れり言初れり言初れり言

初の長きとる初れり言初れり言

とありて終る。或百約中云々

RTI

号乃若しゆ市の治産生云々

一羊質虎皮と云事アリ羊ハ露なく臆病、  
物ハ虎ハ皮と云事アリ羊ハ露なく臆病、  
叶ら敷し。此方と云下子の句ハ折回する  
不ふともくし。振おもし大。て。て。を  
はせ海事一。九。な。事。こ。上。平。ハ。虎。質。羊  
は。上。こ。下。ハ。虎。心。ら。は。は。く。上。ハ。い。下。の。は  
え。う。は。う。く。こ。相。上。も。下。も。か。ら。あ。い。て  
上。子。の。句。と。同。く。を。れ。も。ら。て。と。是。様。に

RTI

一連款ハ安事。亦乃云事。云々云事。亦乃云事。  
と。と。ハ。安。事。に。し。り。出。す。は。安。事。ハ。け。り。う。き。し  
と。ハ。云。事。に。し。り。出。す。は。安。事。ハ。け。り。う。き。し

ゆり。う。り。り。秋。の。ウ。タ。著

い。白。と。金。の。合。は。は。格。成。を。と。り。び。ハ。直。皇。実。比  
白。子。か。け。あ。ひ。ら。十。句。一。句。と。不。で。有。う。故。  
雲。霧。霧。ま。ま。よ。り。く。風。と。し。ふ。せ。席。も。  
あ。せ。ね。ん。と。て。あ。そ。ら。う。ん。ん。有。う。  
才。克。と。是。様。に。云。

RTI

一詞の中は。故を求り玉乃中は。く。と。と。は。云。

し只地さうに別乃出なるハ歌を  
京おきと句か大具そす明く長きく詞  
乃前後人乃おな只詞悟を存之は空能  
て境の句境も先道即成んまむと  
ていふよき詞か来り又風情出まを  
乃理をのほりいりて相と上との  
句といふな道下り乃理云を  
才はほどに句乃祈こせく  
乃不ありは年此出の  
京おきと句か大具そす明く長きく詞

西の月一白毎にんは行くを  
竹の季の柱也新歌  
一竹歌と病と云事

月を手に伝とをぬ花乃合を  
月の夜と花の  
世の月一白毎にんは行くを  
竹の季の柱也新歌  
一竹歌と病と云事

云事 ありしはこれとせし落句ト云し  
 一 字袖の着よ不冠着 不袴着 不背鞆  
 云事 五葉かやうき付といふの女字はアリ  
 てもまき付の腰にアリ 背を付トハ鞆アリ  
 一 字もふふ二文字のなり 三文字の字不向  
 一 事 一字もふふと云し へせむ十  
 二 字もふふと云し 前句乃やと云し  
 けてを移る事 云し  
 一 此言の向付と云事 来たて客人乃来た  
 門ト云むいさるごとくせらば 結句

一 此言と云事 たふ人乃人よ此言と云事  
 付付るなり 是れ一組の字なり  
 一 此言と云事 初めと云事 此言と云事  
 根又云事 云事 云事 云事 云事  
 一 此言と云事 云事 云事 云事 云事

秋の夕はよ小舟は守人  
 うら 栢の若ら乃いづら乃さうけ  
 け 敷いちる 一 定家乃のうよ山家云事 法  
 山里其他のけは 松まなく 巻れわくよ  
 けと けと けと けと けと

一上の白牡丹より精そ者別光り同字いひ  
あしきくせきくまきく

白を毛花も昔野乃姿え

きく青柳やかほくき乃山

之山鳥の清あうや法常り

世に鳴あう秋乃るうせ

一 <sup>二十</sup> 宗我曰我白ツ前乃まうをばせ人の力をけ  
一うをい又前白牡丹あひしうをて鶴の下白  
作りきまやまは紅作りて 糸乃牡丹前  
うそりてとや

歌をうらちの山乃池よまき

おをむそのわけいげはうさん守り作り

一句の意乃れん作りあやふし時、黙然とあふ

云夏作り、席よあふ是なり、池よまきとる

は、あそと作りとせきくまきくけとる

云心をせくされ、前よ作り、意乃心作り

是別前よ、心せきくまきく心作り、あふ

けり、いひくまきく

いとまねくしと神はねきたれ

あわらまき世の秋よまねん 富和

前白の意乃心して人よいとをかく我神の  
清らきまといひ合えよよ意の心ゆるん  
乞引前白のけりていさるる白き

煙子月林乃里行本之れ也

少年物をくはしそ著われと身は  
之よ前白のあい志いりて只上下云  
合てえぬそ身終れとんあうし  
如しのまゝとていふは一社のまゝ  
如き教のふよやの身様ちとては  
はらまのまゝのまゝとては初心の時

ぬらたまはしとく形を定てよとては先又  
はまうけられらんをてれし亦まはさう云  
切らしてとては下白とてはれはう  
けくし

うは物状は流乃流の空

物と云はれけく西風とては物状と  
けしては此日ちれとては口折

さのまゝの本の意乃まゝは

秋夜風あり月の光は

とよほひのきと云はれけりて花は風又  
有ぬの月皆ほひのき事し對しては  
前句乃考余は能身へおし心ゆく付  
くし句の新 ほろきまのまぢり人  
まぢりほりしはゆする管少年

云のくく乃玉はまともよ

塩きくし袖の漆乃藤芥松 宗福  
付ゆるおしと云受ゆること名くの書有  
こまうにけりおし藤乃玉を尋んども  
云れ玉は求あよしと流る終の心は思  
くく我衣のくくとゆる袖の漆藤と

いと求ゆると云は藤り松を乃白と  
真実のまこと今もトア尺又心と  
考余と推する句しゆ

越ゆる乃白の古守

旅人を見あねぬわらわら

け大い幸よ有大えおね旅人と知え  
心一奥の風骨月より是上も乃たくと  
ゆより只はうとゆは出まよ長そ有  
心形は印えとては知心  
てよとこの事 くらよのそ字よま



とと難為位と文字とんをまゝくハて好い  
か文字ハとをまゝくハて好い  
てハてとちりハて好い  
まゝ乃身ハ月とハて好い  
一をまゝかぬけとをまゝくハて好い  
はまはははは

おーハ家の者ハいまゝくハて好い  
いよりははは世のハて好い  
け有ハ采ハ乃ハ文字ハ又ハて好い  
あ〜とあ

一 下知ハ前ハてとをまゝくハて好い  
娘ハ身ハ白ハてとをまゝくハて好い

みまハなハてとをまゝくハて好い  
是ハ後ハ神ハむハてとをまゝくハて好い  
海ハをハてとをまゝくハて好い

一 遊ハ名ハのハ身ハ白ハてとをまゝくハて好い  
乃ハ或ハ法ハてとをまゝくハて好い

一 名ハ姓ハのハ折ハてとをまゝくハて好い  
但ハ好ハてとをまゝくハて好い

一をらんぬふ乃ぬと云ま べきと六不有と  
書てあぬと云ま 空為と云くせぬと云  
るれと云乃字よかよぬの字ふ乃ぬと云  
作り又たなす 空はあたりの 停さう  
空の語りてをそくぬしるれり 忍け  
世母てぬれい各字より終き 空らぬ又  
字みか ゆまゆし 終く其句の心終  
味の空 音まいといけぬと云ぬ  
高そやとけぬといてそい高のぬぬと  
高是すぬぬと云ぬと云ぬ

一十三句を花の空と云ま 空は来り 空は来り  
下し句毎に秋人花の句を糾紛して十  
三句目までのもうゆと云 其故は独吟り  
こゝを此宗返りて停つと云はくは此  
徒なりと云す事と云  
一ありてよと云と云 最句は只れと云言  
ん二ありと云と云 字のなまぬと云句句  
是の句とゆと云と云 此句は句とゆと云  
あつと云と云と云 此句は句と云と云  
一秀句 枕河 風洞 之 神 年 字 物 云 枕

初ハ前句方くえ、二句いそれまじく、秀句  
凡初、事二句、折品句、るも、左云、前句、  
い、く、平、く、て、い、者、て、あ、り、く、ん、

秀句、も、方、松、く、枝、乃、家、あ、む、り、者

花、乃、青、れ、志、破、の、御、り、物、と、あ、り

ゆ、も、や、り、舟、舟、は、あ、り、人

凡、れ、若、志、ほ、い、乃、松、よ、日、常、若、え

了、終、分、合、二、句、か、と、終、の、契、り、よ、思、た、て、兵、合、の

松、洞、伊、吹、風、よ、浪、や、碎、り、る、存

む、り、き、乃、若、江、の、浦、よ、飛、鶴

一、夜、ハ、口、道、は、い、く、め、さ、ん

あ、ら、海、乃、沖、室、れ、よ、か、り、終、て

契、り、に、あ、り、ま、い、く、さ、ま、あ、り

凡、初、終、の、あ、り、き、切、り、終、り、と、い、ゆ、ま、り

垂、ま、れ、終、ま、せ、ぬ、月、よ、夢、松、く

松、を、せ、ゆ、も、く、あ、り、き、の、以

川、終、り、れ、終、り、せ、ぬ、床、原、え

一、七、冬、字、の、あ、り、く、と、き、ら、れ、あ、り、り、と、云、ま、り、ハ

上、の、句、中、七、冬、字、終、の、こ、の、乃、と、一、字、あ、り、り

と、を、云、く、た、ら、乃、ま、れ、を、ま、り、上、の、句、下、れ

子多字方の中、庭の高より一字れ  
ちくくともて

大いこふしこ腰くこは支別をくし  
心教十巻上云書にもんてをりいこくこ

と云、腰より似合、友着なとの教子極  
は松と牛し事 姫

一 心教の書云十法なるは、心教の  
道にあり

利生堪能秘古修心 道心平并  
明作合閑人 卒危身乃能

常々もいしををくくは守備た人むり  
けりも新有事

あり七歳 大酒 臆眠 新後 有徳  
心教字の 早口 謹得

一 式圖書をゆると云い、うなる事やけるは  
松し 前句の句を引合え一句の紅  
有竹の言空ありはをきると云い 初心の所  
毎度と云い 但ひこの詞ありん

一 字紙のよき句は、何れと教は、少くも  
少月にく切な草、いふれなうく、系く

終ききる終ききる方しあひまれとまれ  
才終きて又志すしぬやうにたす  
先をまうぬと志す

一 再歴記 夜ふれ柱のこくにまうたす  
おしうも志すしぬやうにたす  
がうたす

ま方し日二丈の扉を失わさくしとむ  
振るまうとすぬと志すしぬやうにたす

海よりうき道うし子孫

いろはの池乃をうし鴨をうきおま音

かやうれうにうし思合はるし

一 <sup>うた</sup> 了まその口傳し事き度も吟しひし吟した

音よきたもゆきうすうてまえうしと志す

いよ詞をうきうしうしうし又早むつ

しきやうはちやうはちわうしと志す

何是も五音の相付いぬと志す

ひんぬえんびんとしひく志思まうた

まて終く口乃舌の端<sup>端</sup>も味えて志す

五音の音高前微羽し亦唇舌牙歯歯

あつしその始りくアウウカノ音と志す

一 是る年生かあらはるる事  
一 是る方に之を 現在 未来 事  
前句ハるる事 ありハ 現在 後句ハ  
未來  
るる事 志多字ありし 是ハ 今 同し  
現在ノ 一 一 一 一 一 一 一  
未來ノ 一 一 一 一 一 一 一  
らむし 一 一 一 一 一 一 一  
是ハ 一 一 一 一 一 一 一

一 是る年生かあらはるる事  
一 是る方に之を 現在 未来 事  
前句ハるる事 ありハ 現在 後句ハ  
未來  
るる事 志多字ありし 是ハ 今 同し  
現在ノ 一 一 一 一 一 一 一  
未來ノ 一 一 一 一 一 一 一  
らむし 一 一 一 一 一 一 一  
是ハ 一 一 一 一 一 一 一

二のまゝ 字より方とてすんや  
しかばを袖のゆきまはきふねきえ 終  
とらんをふしとねむしん  
とつたよ今おもしろいね乃時さく 字相  
尋来くげまゝ 字より方とていふけ

けを待つるもさし竹の匂之れ世心も海に  
又えをりそとありの不澄然當かうて吟  
合くけとて万流をたれそやう

海らうあう身せんくし

命をいしよあ乃む之あへ 経

浪子やう子浦の舟人

山はくく志願れ續き了は成んは

一平舟のにも遠一舟乃よとまうけんは終てを新

れらふいなくたやけはあき

里さき人の命と志ぬせよ 経

いりやうけ立やう

今もまえまき、初花乃本の舟よ 量乃

世にまうハそ修けさう 平舟のよあう

去るてせ

そののをしり 寄うあう兼作

月影の志しけりさるはらま 好乃

いしく早し後のせあん

命とそしあけし 琴しし 字初

けらうらまのひさあきいよいそをえ

けとそそみなち之け乃よと海り

一 浚と名く身事浚、みな穀の四心  
みかして、新野浚と名く身事、前白乃  
之也、  
庭なる松乃板とて、  
山鳥、  
啼也、  
らむ

庭なる松乃板とて、  
山鳥、  
啼也、  
らむ

庭なる松やあゝいさるん  
たぐも、霜乃思ふ之、日、

家むはらひは春や来ぬん

雪の心事を里中野乃知りぬ 字補

一 志とて、  
をういつこらや、  
日らぬも秋とて、  
危の奈れ、  
わつこも、  
一りり、  
て、

一 志とて、  
をういつこらや、  
日らぬも秋とて、  
危の奈れ、  
わつこも、  
一りり、  
て、

もまよなほ秋の夜乃月



人より事付致身は心守る事なり

仙人やかりぬ年のほりしん

あまき春くし春色能おもれ

一るりよ物と云相けしん二有し ~~事~~

はらり乃冬のもろとかゆん

月の前よん物事ハ其物也

春秋くす庭乃はきこし

はらりのころよ身は物と云とらふん

春秋書すとせはとて争く前分は

ひくしんくち振しけとるる也

うらまはしむね物とありん事ハ下品

のゆ物と云二の心ハ日月身四者身なり

日心と云ハ平身ハ四者と云ハ遠身ハ心は

能くさるる也

はらり乃冬のもろとかゆん

後のせよ河乃山とありん物と

そハ地のゆけしんハ日心の物と

春くわあハ四とれさむ

神ハ心かその語ハち物と

いれとの身振ハ四者のおとと云

一 面おもくもく 中流に位おせのいひけり  
もはけはるはも作者のうら若たにちりて身  
てよそに随然下知ちるににおえはるは  
すむもやご河も水のこころ  
味い故はるり今も海をわや  
二 庄打ももよふ平松の露  
月ゆま人のたれも宿をわや  
一 下知のたまふけり奉て當り流るり  
もれ 絶身位上平れてだくも平けり  
もあ

人かあもも方をそこゆるよ  
別つた歌のうさこのきくらわさ  
ああぬ乃ももぬなれもひら  
かやえぬわもも舟乃も向り山  
一 下知の何とれきてるえにゆれんまは乃字  
もりもえけりた絶身志もちとほ絶初之れ  
一 ちとよそええに身位そも二の心アリをえ  
やにいたちて身あもぬらも平けり  
廿日の月ろをさくおぬれ  
さくらもちとしくななまさやうと茶

きくく一本乃様ううおれら  
 危う身れいん乃たもをあうく  
 乞ひみなをほくくうくくくく月うとをま  
 てまなくあわとあうまあうまあうま  
 と遠てせん余のうみまをたなうま  
 はさききゆく水うにこお  
 信乃乃つないく舟を脚うん  
 乞ひあうのくう平舟の我  
 一尤のてまをれん候乞しをゆえくく  
 あういん二の心ア

別を人うかまううはりたり  
 尋う位回えうりをゆくうく  
 人のあせぬきれや乃乃  
 口とうちほせを誰う移せん  
 ありけぬきをせうくうく  
 拂うすも音やむし之客乃所  
 乞ひをほくくくくく位回と遠て  
 身たんし余乃白そよくく  
 きい松の月をゆくくもあ  
 松をうくあうしの風乃草花

霜のむすき野を冬は雪に  
 出るともむ隙にありや  
 そらみながらくけり  
 一色と云ふよをよけ  
 ほらも二の心あり

或は昔もと云ふよをよけ  
 けり  
 つかうよ一人に袖や  
 文のほ月を今と  
 舟の中にも春を

つらぬるよ  
 そらみながらくけり  
 一色と云ふよをよけ  
 ほらも二の心あり

心はしるせぬ  
 二つも  
 三つも  
 一色と云ふよをよけ

一色と云ふよをよけ  
 ほらも二の心あり

事ありろき掃のるし

山の上よりよほくうん

春の夜も花よりおぬ月も

初霜まじりいけ多し

情やらぬおの定やふん

そはみないそふ

まふもし人よあそぬけ

秋の夜ハ節令の風をと

くはのそま田秋もつ

月まじり人を難波乃

そはいそふ身もそそ

ぬれ上平此新し初

一やと云てよそよ

まふもいひく

の日記もぬおと

古の想ふとえつ

まふのうそよ

おのるりとし

未そを記宿乃

一ゆびと云てよ

まゝに初春を返す日なり  
そ年のこゆきは未だ新む芽も  
此の徳乃ほぶをわぬみゆえ  
舟もきこゆらうしれ松を

一きにとりてまをにけ  
つら心にかき家えなり  
待人乃野のきで才者も待て  
まをきにうとれまうとせを  
風あは山松の根のかりの居  
けだよと云初めを二たうとらうをえ

てまをこ初心ときとすし二あふうとれ不な  
まをまなまをとあふく身より昔の留も  
て知

一はと云てまをにけ  
おもや鳥の音もかきん  
まをまなまを今もま月いさき  
月をほし入らぬやの月  
花の香も夜はむよふとめえ  
一をうりト云てまをにけ  
吹風をうりえよを

を宿の夜やあめ乃時あしん

水氷りけんそらり同し来て

いとら舟くううの夕ぐれ

一いつくよとてまえし舟航けてまえこ二の心あり

舟路乃あとし乃山いはくそ

松ぞくれまのあつんし朝守を

けしやうの穀くわさき

いつくも縁乃かり終しけり

宿下とに始しあやられ草溜る

そい草舟乃てまを

一停りまとてまえし舟や

いつくも縁乃のいさぢなまし

たしひ子のあらりの歌乃中し終て

一中こととてまえし舟や一又二句はまもてまを

中ことしやまし中のみ

山ゆり咲跡色のまげしはかき介せ

ほらかけくしえ偽りまを

中ことしやまし中のみ

一又とてまえし舟や

又まこゆそ入相のそ





一心くらく云てこそ并 亦云と云てこそ

さうらうさうさうや地ねさうん

月影の夜ちる甲斐に語れりて

まろと国しハ子とけりお経

余下よかけ今にたなこ乃何まじ

あやと云もな成けりりの経

少松のちかす斬端乃草かたれ

一箇家の字ありては院そね 亦せまやほ

てこそ

とくれはまきをくらゆくはる

道よりし人のかれりし身

あゆみ別路此有りの月

心せし旅の終はあ乃け津津流

一世いといさるる居閑居をれをえ一向よ今

いと世入者終もまじとと存まじと

すくあまのまじ 吉うよこうま身とそ里

きにいよいそをてはほろまはれさことと

心のかまよタうそめ

まおてお字もぬ寄の名

いせやねとくくやまきいせ

叶しあはさる人言はせし海乃月  
あきくせりあ  
後高松

山家乃感悟まよとんはもねわ  
一窓乃道方あといれりあゆま心は  
れあはくい新角いささあひねむと  
いふ又今よ思えねる祈ると一窓乃飛  
切さるるいせ乃道方よ

此那ももねるよ行えんたり  
如くいれきかぬはまよとん  
乞北窓乃切さるるいせ乃道方

身乃よまををねるあ  
難角え秋といえむ申あ  
をねるよまををねるあ  
寺乃ぬももねるあ  
女新あまををねるあ

きくた乃あををねるあ  
あきくせりあ  
いそくあまををねるあ  
恨あまををねるあ  
ねまの寸字をそし雨のゆあ

夜なぐ八咫の月を鷹啼く

真秋夜ありおねとよこら

そ、おらま下向るは後おらあてら

一 近我集の序云云は、辛十二所改まびく  
空を乃能之と求るとも定む何と  
心乃あらしき汝福なる今上吉の先達  
今の母よし討我をあきて直のまを徳は  
あてつづりて、此ゆとまづりて、正風  
ま子今

一 武岡ま吉事乃前白の似るやび吉事

けり所と南白依岡ゆ程ま吉事おら

一本前をとらに其つとあてらとゆもつ

法は只ま吉事とわらとて吉事とてとるは猶

盗く條く是とてとて先達やうくにま

ひ ちの子星乃吉事とらく長る

涙はとてまに地とよ月ままに我身

ひんこれ事乃松風

印うれい身はこれ秋まあねとらつて、南

る此秋集一月ま又我身はこれ秋とま

竹とて字とて格とて又是れ我れ存白と  
竹字と立格や 亦とて宿乃 毒い字白と  
いつ宿乃格の立格や 凡つてむいの外と  
意う来ませる 一云うとれり人の事ぬ  
をいつ者の格の立格や 乃人の為とあるは  
人上格と成恨と心折と一と 竹と格と  
け折と一と 字にせし心折と成格と一と  
なるしむら乃格と

をゆと一の叙句切字と事

竹のぬき事とあるは右乃竹

け仁立やして必はぬき事本はあはけけの竹乃  
竹とて奇妙と一と 亦竹とて竹とぬき事  
をといふは竹と一と おふあると一と  
一と一と竹と一と その字と竹字乃亦と一と  
竹とて常乃て一とをこれその字と一と切字  
りなるしと 亦あやと一と 又古人乃二の白乃  
と竹と一と字と一と 竹と一と切字かと一と  
人あるゆと一と 竹と一と 竹と一と  
字と一と一と 竹と一と 竹と一と  
一と一と一と 竹と一と 竹と一と

又おゆらぐとすてし切ありは又紅白の  
わらき方雨もさきり元日

春も春もいそぐぬゆを夜乃雨のハ  
春も春もいそぐぬゆを夜乃雨のハ  
つら下心おくる乃曉もさきりけつとい  
ゆるや隠者の身れおととおとて一入既を  
なごし 雲やをゆそし 此春の身なごし  
云能切いぬ白も春の春白大ゆそし 春白  
春の口はあふ春 ぼく 吾道の徳徳あが  
志えんもいけえやう志ゆとすもはる

ゆつづと道乃は

事長より竹受の書云永享年中少時百  
浄不換浄白 瑞籬乃古くうし 松の雪とあ  
るをいそ 梵竹庵主家近くそい  
きとゆはたも政をいそ 為山向を大廻世  
た初故トはさし 此間下れをいそ  
しそ 竹ちと浄年交あしり 部乃  
後天石竹し 羅川のさしとゆ  
そ外二字初は初をいそ ぬ白は  
ぬし事

一 糸白くたの切字をこしをくまはくちり  
若しはくまきつさくはくちり 宝蔵



